

# 明治学院大学について考える

橋本 茂

私たちのキリスト教研究所（以下、キリ研と略す）は、インターファカルティな研究員よりなる研究所です。それぞれ専門を異にする研究員間の会話は、他では味わえない、とても興味深いものです。この特徴を生かして、12月に横浜校地のブラウン館で行われた恒例の「一泊研究会」で、「明治学院大学を考える」というテーマで、3人の研究員に発題してもらいました。一般教育部の水落研究員には「教養とは何か」について、法学部の辻研究員には「ロー・スクールが明治学院にどんな影響を及ぼすか」について、文学部の真崎研究員には「現在の明治学院について」話していただきました。その発題内容をそれぞれの発題者に短くまとめていただき、それをここに掲載しました。

大学が冬の時代を迎えると言われて久しいのですが、はたして私たちの明治学院大学はその冬の時代への備えができているのでしょうか。先輩の先生方が苦勞して作った一般教育部はいとも簡単に廃止され、その後、多くの先生はどこにも所属しない宙ぶらりんな状態が続いています。この廃止は大きな発展を意味するのでしょうか、あるいは、偉大なる後退を意味するのでしょうか。このような状況にある一般教育部の水落教授に、彼の専門と教室での経験を生かして、「教養とはなにか」について基本的なことについて発表をしてもらいました。今、一番求められているのは、人間形成に関わる教養教育であると、水落先生は主張していると思います。

教学改革の目玉として「言語コミュニケ

ーション学部」が検討されてきましたが、前学長の主張だけで終わりました。今、法学部が一丸となって「ロー・スクール」の創設を訴えています。私たちはこのロー・スクールについていろいろな噂をもとに勝手なことを言っています。そこで、このロー・スクールの設立準備の中心人物である辻教授より、直接、「ロー・スクールが明治学院にとってどんな影響を持つか」について、いろいろな角度から話してもらいました。財政上の問題はもちろん、私たちが考えられる他の問題も一つ一つ検討しながら、設立の準備がなされていることを、辻先生の話から知ることができます。今は、厳しい決断が求められていると思います。

最後に、学生部長や学長室長を歴任し、大学を広い目で見てきた真崎教授に、「明治学院の現状について、話してもらいました。新設学部をめぐる紛糾、一般教育部の解体、臨時定員をいかに確保するか、などに時間をとられているうちに、私たちは、大学の大きな構成員である学生の教育や生活についてほとんど考えないできたのではないのでしょうか。その結果、今、私たちの明治学院大学は学生にとって夢も希望もない大学になっているのではないのでしょうか。このことについて、真崎先生に率直に話してもらいました。

この三研究員の発題を肴に、明治学院について考えていただけたら幸甚です。

なお、キリ研の諸事情で遅れましたが、元研究員の福元真由美さんの原稿を掲載することができました。改めて福元さんにお礼申し上げます。

(はしもと しげる 所長・社会学部教授)